

平成 24 年度 【 学園研究費助成金 】 研究成果報告書

学部名 教育学部

フリガナ オオモリタカコ
氏名 大森 隆子

平成 23 年度様式
<参考>

研究期間 平成 24 年度

研究課題名 我が国とドイツの折り紙のルーツから考える折り紙教育

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者			
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

現在、幼児教育の場で、折り紙は保育教材の一つとして取り上げられている。しかしながら造形活動としてというより、しつけや伝承遊びの位置づけから扱われることが多く、教材としての意味や価値に関しては明確でない。教材としての折り紙は、明治初期に導入されたドイツのフレーベル式幼稚園の「畳紙」と我が国伝来の「折りもの」が合流する形で形成されたものが原点という考えがある。折り紙を教育的視点から、すなわち保育教材として指導法も含めて捉えるには、ドイツと日本の折り紙作品の特徴や教育的目的の違いに立ち返って解明することが肝要である。本研究においては、明治初期に焦点を当てて検証することを目的とする。

2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

我が国の幼稚園創設期の資料を整理して、ドイツと我が国の幼稚園の折り紙作品の実態や指導法の特徴を明らかにした。文献資料としては、近年公刊された出版物、これまでに公開された文献の洗い出しを行った。並行して、実際に土井子供くらし館のコレクションや日本折り紙博物館の新資料室などを訪ねて資料収集を行った。加えて研究者への聞き取り調査として、直接 2～3 人の方 (赤羽恵子氏他) を訪問して貴重な話を伺った。

共同研究「外国の教育方法を日本に導入するとこの課題と検討」において、本研究をもとに各研究者の視点と絡めて内容を深めた。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

折り紙のルーツについては、日本伝来説と諸外国それぞれに発祥したという説がある。私はこれまでの研究を通して日本独自の折り紙が、江戸時代、もしくは室町時代に海外に伝わったものを起源とするという考え方に傾きつつある。しかしながらそれぞれの国や地域にも、独自の文化に基づいて自然発生的に出来上がった折り紙作品が存在することは否定し難い。特にドイツではフレーベルの保育教材に組み込まれていることから、長い歴史があることは一般に認められている。実際の作品をみてみると、ドイツの場合は左右・上下・斜めの折り線が均分で、いわゆる幾何学模様折りが大勢を占めており、数学の基礎として位置付けられていたことが明白である。それに対し、わが国の作品は儀式用折り形をルーツとし、それは均分折りでなく、感覚的に折り線が折られるところに特徴を持つ。また、遊戯折り紙作品としては、具象物を表現したものが多く、ドイツの作品とは際立った違いがある。

しかし日本伝統と考えられていた作品にもドイツ発祥といわれるものがあり、折り紙のルーツをめぐっては研究面でまだまだ緒に就いたばかりである。今年度の調査で、高木智氏の検証に着目した。それは、折り紙博物館の展示コーナー、タイトル「西洋から伝わった折り紙」に記してあった「折り紙は日本固有の文化ではありませんでした」という記述である。その根拠として、フレーベルの死後10年ほどの後にオランダで出版された書物に、わが国伝来と思われていた「だまし船」、「やっこさん」、「はかま」などが図示されていることを挙げている。

折り紙の指導法をめぐる論争についても研究を進めた。特に“創造性”の視点である。折り紙を通して育てるべき力量についての考えの違い、しつけや正確性と自由性や創造性といった対照的なねらいの違いである。これは作品の特徴から検証し、成果を上げた。明治初期の保育者たちが外来文化に接した際に、あくまで自国の文化観に立って、主体的に導入を図った点を検証したことも成果として挙げる。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①遊戯折り紙	②江戸時代	③儀式用折り形	④創造性
⑤幾何学模様折り	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

学会発表 (自主シンポジウム)

甲斐仁子、大森隆子、青木久子、オムリ慶子、山田りよこ

「外国の教育方法を日本に導入するときの課題と検討」日本保育学会第65回大会、2012年5月5日、『日本保育学会第65回大会発表要旨集』p141

研究成果公開予定

甲斐仁子、大森隆子、青木久子、オムリ慶子、山田りよこ「外国の教育方法を日本に導入するときの課題と検討」(『藤女子大学 紀要 50号』2013年3月予定)